

高校生における携帯電話と性意識、 性行動について

池田かよ子・久保田美雪・渡邊典子

新潟青陵大学看護学科

A Study of cellular phone possessors' sex consciousness and sex action in high school

IKEDA Kayoko · KUBOTA Miyuki · WATANABE Noriko

NIIGATA SEIRYO UNIVERSITY
DEPARTMENT OF NURSING

Abstract

The purpose of this survey for 304 high school students (116 boys and 188 girls) is to make sure how high school students who possess cellular phones use their phones, what they use their phones for, to what extent they get information about sex, how far they feel conscious of sex and their sex action.

- (1) About 60% of the girls have cellular phones, which is larger than the rate of the boys who have cellular phones.
- (2) As for the frequency of using cellular phones, about 80% of the girls use phone oftener compared with boys, 40%.
- (3) Concerning the purpose of using phone, the students say they use phones mainly because they want to be in touch with their friends, and they use phones as a means of communication.
- (4) Those who have a cellular phone have more interest and higher concern in getting information about a sex, reading sex magazine and watching adult video and what is more, they have experienced sexual contact with other sex.
- (5) On their view of sexual intercourse those who have cellular phones answer sexual intercourse as a matter of fact and say sex is pleasing or sex is important for human beings.
- (6) Those having cellular phone have a more high rate of sexual experience (intercourse) and their sex action is more active.

Key words

A cellular phone, sex consciousness, sex action, a high school .

要 旨

携帯電話をもっている高校生304人（うち男子116人、女子188人）について、その使用頻度や目的、性情報の接触状況、性意識や性行動について調査を実施した。携帯電話を持っている人は、男子より女子の方が6割と多かった。携帯電話の使用頻度は、「かなり使っている」が男子4割程度であるのに対して、女子は8割と多かった。携帯電話の使用目的では友達との連絡が多く、パーソナルコミュニケーション手段として利用していた。性に関する雑誌やアダルトビデオなどの性情報では、携帯電話を持っている人の方が興味、関心が高く、接触している頻度も多かった。性交に関する感じ方については、携帯電話を持っている人の方が「セックスは楽しいもの」「セックスは人間にとって大切なもの」と回答し、性交を肯定的に捉えていた。性行動は、携帯電話を持っている人の方がより経験率が高く、性行動が活発化している。

キーワード

携帯電話 性意識 性行動 高校生

はじめに

現代の若者は情報技術（Information Technology：IT）が普及した社会の中で、当たり前のように様々なITを生活上のツールとして使用している。特に、携帯電話は情報のやり取りやコミュニケーションという情報通信手段として大きな役割を果たしている。当初携帯電話は、大人が業務上の利便性を考えたツールであり、かなり高価なものであった。しかし、1990年代のポケットベルに始まり、パーソナルコミュニケーションとしてのPHS・携帯電話が、簡単にしかも安く手に入ることにより、生活の中に深く浸透し、今やなくてはならないものになっている。

携帯電話は電話の機能を越え、様々な情報を時間や場所に関係なく受信し、そして発信し続けている。そのため、お互い全く知らない人同士でも情報のやり取りができることにより、交際や活動範囲が際限なく広がっていく。また必要な情報だけでなく、反対に「迷惑メール」や「出会い系サイト」による被害も社会問題化している。このような新しいメディアの普及により、青少年を取り巻く環境は大きく変化していると思われる。

そこで今回、高校生を対象にPHS・携帯電話・携帯メール（以下、併せて携帯電話とする）の使用頻度や使用目的、携帯電話の有無と性意識および性行動にどのような影響を及ぼしているのか比較検討したので報告する。

調査対象と方法

調査対象は、調査協力の得られた新潟県内の公立普通高校3校の高校生548人（有効回答数474人 86.5%）である。調査方法は、2002年7月～9月に、各校の教諭を通じて、調査用紙と封筒を配布し、プライバシーを守るため及び回答内容の正確さを期するために、生徒が自記し各自で封筒に入れ教諭が回収する方法を用いた。

対象者には、アンケートの記入については自由意志であり、研究以外に使用することがないこと、データは統計的に処理し個人の回答が公にされることのないことを教諭より説

明をしてもらい倫理的配慮を行った。

調査内容は、携帯電話の使用頻度や目的、携帯電話所持の有無と性情報の接触状況、性意識、性行動について比較検討した。

データの分析方法は、統計ソフト「SPSS」を用い基本統計量の算出、携帯電話所持の有無、男女差について²検定を行った。

調査結果

1. 対象者の属性

調査用紙配布数578人で、有効回答数474人（82.0%）であった。性別で見ると、男子219人（46.2%）、女子255人（53.8%）であり、男女の割合はほぼ同数であった。年齢は、15歳45人（9.6%）、16歳165人（35.1%）、17歳182人（38.7%）、18歳78人（16.6%）で、平均年齢は16.6歳であった。

2. 携帯電話の有無について

携帯電話を持っている人は、304人（64.1%）で、その内訳は、男子116人（38.2%）、女子188人（61.8%）であり、女子の方が有意に高かった（表1）

3. 携帯電話の使用頻度について

携帯電話を持っている人の使用頻度は、全体では「かなり使っている」が64.0%であった。性別で見ると、男子は「かなり使っている」44.3%に対して、女子では76.1%と多く、男女間で使用頻度に違いが見られた（図1）

4. 携帯電話の使用目的について

携帯電話を持っている人の使用目的では、男子は「友達との連絡」89.7%「情報を得る」30.2%が多く、女子は「友達との連絡」96.3%「家族との連絡」60.6%が多かった。「家族との連絡」（ $P < 0.01$ ）では、男女差に有意差がみられた（図2）

5. 携帯電話の有無と性情報、性意識、性行動について

まず性情報の接触状況では、雑誌・週刊誌などの性に関する内容を読んだことがあるかについては、携帯電話を持っている人で、「よく読む」15.0%、「時々読む」50.0%を合わせると6割以上の人々が接触している。一方、携帯電話を持っていない人は、「よく読む」8.6%、「時々読む」35.8%を合わせると4割

表1 携帯電話の有無と性別

	n	男子	女子	χ^2 値
携帯電話あり	304	116 (38.2%)	188 (61.8%)	$\chi^2(1) = 23.41$ **
携帯電話なし	166	102 (61.4%)	64 (38.6%)	

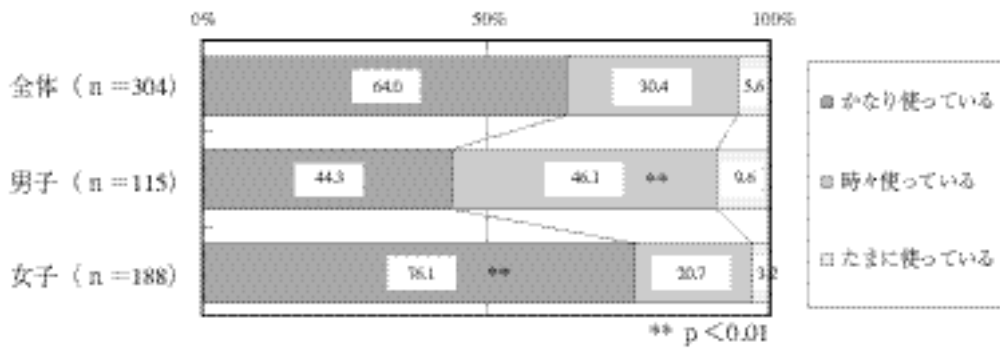


図1 携帯電話の使用頻度

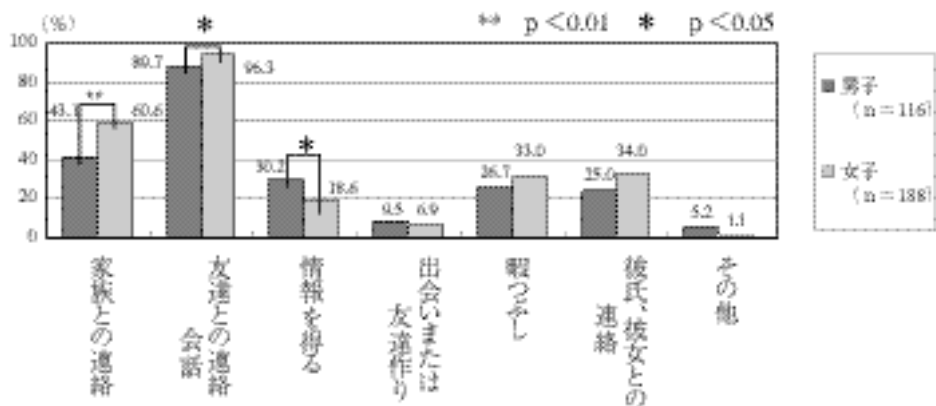


図2 携帯電話の使用目的 (複数回答)

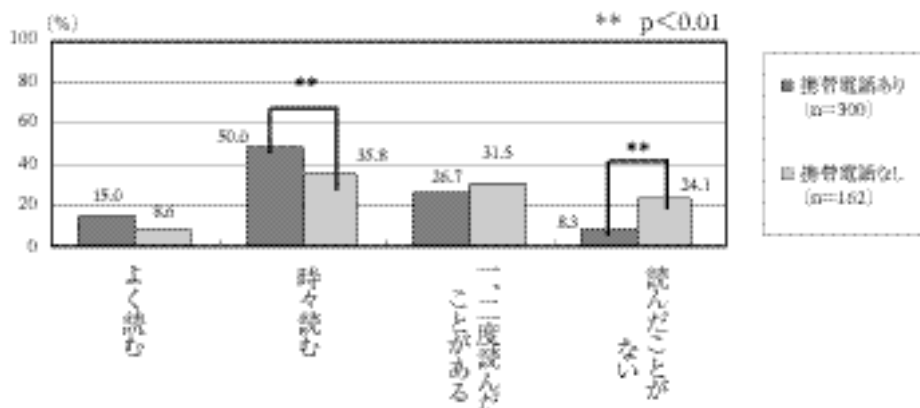


図3 携帯電話の有無と週刊誌・雑誌の接触頻度

の人が接触している。中でも「時々読む」(P<0.01)項目は携帯電話を持っている人に、また「読んだ事がない」(P<0.01)項目は持っていない人に有意に高く、携帯電話を持っている人の方がこれらの性情報により多く接していた(図3)。

携帯電話を持っている人の性別との比較では、男子は「よく読む」(P<0.01)が女子より高く、女子は「一、二度読んだことがある」(P<0.01)が男子より高く、男女差がみられた(図4)。

アダルトビデオの視聴頻度については、「よく見る」6.3%、「時々見る」19.3%をあわせると、携帯電話を持っている人で25.6%、持っていない人は「よく見る」4.2%、「時々見る」15.2%とあわせると19.4%であった。「一、二度見たことがある」(P<0.01)項目は携帯電話を持っている人に、また「見た事がない」(P<0.01)項目は持っていない人に有意に高かった。(図5)。

携帯電話を持っている人の性別との比較では、男子は「よく見る」(P<0.01)「時々見る」(P<0.01)が女子より高く、女子は「一、二度見たことがある」(P<0.01)が男子より高かった。週刊誌・雑誌の接触頻度と同様に性別においても男女差がみられた(図6)。

性交や性に関することについてどう感じているかという性意識は、携帯電話を持っていない人より、持っている人の方が「セックスは人間にとって大切なものである」72.0%「性に関心がある」63.5%「お互いの愛を確かめ合うにはセックスは必要だ」47.0%と肯定的な意見が多くみられた。しかし、性について否定的な意見として、「性的欲求はできるだけ抑えるべき」29.5%「性に関することを人前で口にすべきでない」21.7%「セックスはいやらしいものである」10.8%という項目は、携帯電話を持っていない人に多い傾向がみられた(表2)。

性行動についてみると、携帯電話を持っている人は、「キス」56.0%「ペッティング」40.1%、「セックス」32.8%とそれぞれの経験率が、すべて携帯電話を持っていない人より有意に高かった(表3)。また性別では、携帯電話を持っている女子は男子より、「キス」

「ペッティング」「セックス」の経験割合が多かったが、有意な差はみられなかった(図7)。

・考 察

1. 携帯電話の使用頻度と目的について

携帯電話は、持ち運びに便利なパーソナルなメディアとして若者の間に急速な勢いで普及している。業務用中心に発展してきた電話が、1995以降携帯電話のコスト、なかでも利用にかかる費用が急激に減少したことが普及の要因と指摘されている。中村によれば、2000年の時点で、すでに中学生は15.3%、高校生ではその2倍以上の55.8%が携帯電話を持っている。本調査では、携帯電話を持っている高校生は、男子が約4割、女子が6割を超えている。第5回青少年の性行動全国調査でも男子52.5%、女子62.1%と過半数を超え、メディアの個人化が高校生の段階でもみられている。

性別では、男子より女子に持っている人が多かった。携帯電話は居場所を確認することができたり、いつでも連絡がとれるという安心感からか、女子については通学時の安全を考えて家族の方から携帯電話を持たせている場合も少なくないので、男子に比べて多くなっている。

携帯電話の使用頻度について、東京都生活文化局は「高校生の約3割が毎日のように携帯電話・PHSで通話し、さらに約7割という多数派が毎日のようにメールを交換している」と報告している。本調査でも「かなり使っている」が全体で6割を超えていた。中村は、携帯電話の人間関係および日常生活への影響のメカニズムについて、簡便化(手近にあるため簡単に電話ができる)、直接性(直接本人と話せる)、常態化(いつでも電話ができる)、そしてその他の特徴(時計機能、メモリー機能、発信番号表示機能、着信音の多様性、加入・解約の容易さ)をあげている。これらの特徴から、高校生の交際や活動の範囲がますます広がり、青少年を取り巻くメディアの環境の大きさが伺える。

携帯電話の使用目的は、男女とも「友達との連絡」が9割であり、男女ともパーソナル

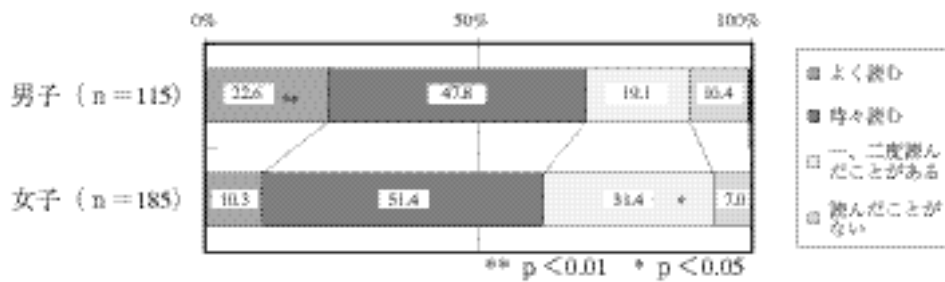


図4 携帯電話所持者の性別と週刊誌・雑誌の接触頻

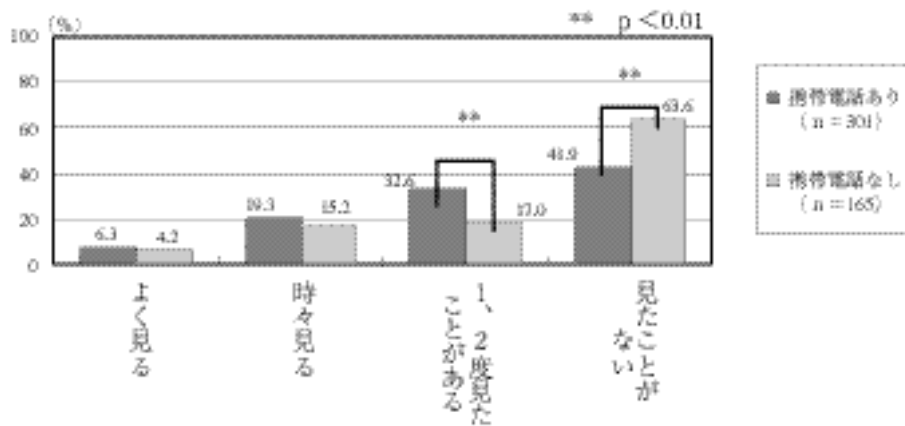


図5 携帯電話の有無とアダルトビデオの視聴頻度

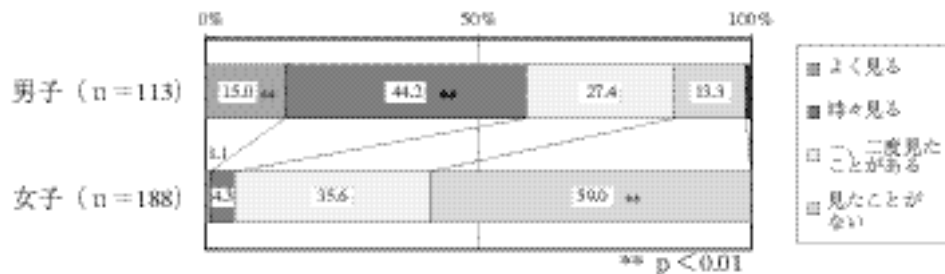


図6 携帯電話所持者の性別とアダルトビデオの視聴頻度

表2 携帯電話の有無と性意識 (複数回答)

		人 (%)	
		携帯電話あり (n=304)	携帯電話なし (n=166)
肯定的	セックスは人間にとって大切なものである	219 (72.0)	87 (52.4)
	性について関心がある	193 (63.5)	73 (44.0)
	お互いの愛を確かめ合うにはセックスは必要だ	143 (47.0)	44 (26.5)
	セックスは楽しいものである	107 (35.2)	38 (22.9)
	性に関する事柄についてよく考えることがある	100 (32.9)	42 (25.3)
否定的	性的欲求はできるだけ抑えるべきである	72 (23.7)	49 (29.5)
	性に関することを人前で口にすべきでない	52 (17.1)	36 (21.7)
	セックスはいやらしいものである	28 (9.2)	18 (10.8)
	性についての話を聞くのは耐えられない	13 (4.3)	15 (9.0)
	男性は、女性をセックスの対象としてしかみていない	24 (7.9)	7 (4.2)

表3 携帯電話の有無と性行動の経験率

		n	経験あり	経験なし	人 (%)
キス	携帯電話あり	298	56.0	44.0	$\chi^2(1) = 61.63^{**}$
	携帯電話なし	164	18.3	81.7	
ベッチィング	携帯電話あり	294	40.1	59.9	$\chi^2(1) = 62.61^{**}$
	携帯電話なし	163	5.5	94.5	
セックス	携帯電話あり	296	32.8	67.2	$\chi^2(1) = 56.66^{**}$
	携帯電話なし	164	2.4	97.6	

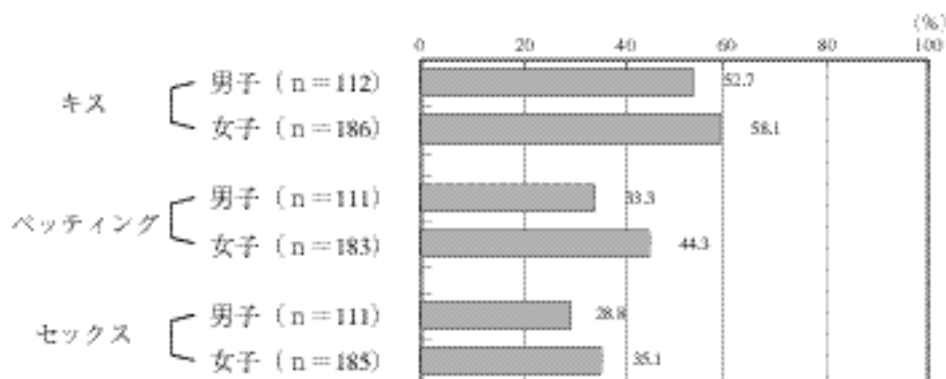


図7 携帯電話所持者の性別と性行動の経験率

コミュニケーション手段として使用している。青年期における友人とは、生活のあらゆる面に多くの大きな影響力をもつ存在である。その友人関係の中で携帯電話の果たす役割は大きく、新しい友人を作ることから、親しい友人との関係を深めるために、常に繋がっていることの心理的な安心感を得ることができる。高校生においても、友人との連絡を中心に、友人関係の安定や連帯、そしてさまざまな情報発信などパーソナルコミュニケーションツールとして使用している。

2. 携帯電話の有無と性情報、性意識、性行動について

情報化の進展に伴い、多種多様な性情報がマスメディアを通じて流され、選択の余地のないまま若者の生活に入ってきている。マスメディアの中の週刊誌や雑誌などの性行動に関する内容や記事、アダルトビデオの視聴など性情報の接触状況をみると、全体的によく接している。中でも携帯電話を持っていない人より持っている人の方が、さらに性別では携帯電話を持っている女子より男子の方が多く接している。携帯電話が電話の機能をこえ、メディアとしての機能を持ち、携帯ウェブ

(ホームページ)や携帯オフラインとして普及し多くの若者が使用している。第5回青少年の性行動全国調査は、性に関する行動や意識に最も影響を与えたものとして、学校段階や性別を問わず、「友人」が最も多く、次に「マンガ・コミックス」「新聞や雑誌の記事」「テレビ・ラジオ」などのマスメディアを上げている。こうした「メディアの個人化は、家族(とくに親)の統制を離れた性情報への接触や友人とのコミュニケーションを可能にすることによって、青少年の交友関係の質的な変化をもたらすとともに、性行動や意識にも影響を与えている」と推測している。都筑ら⁸⁾が指摘しているように、高校生が得ている性情報は商業的なものに片寄せざるを得ず、メディアリテラシーについての教育が不可欠であると考えられる。

性交や性に関する意識については、携帯電話を持っている人の方が性の否定的なイメージより肯定的なイメージで捉え、携帯電話を持っているか持っていないかによって、性の捉え方に違いがみられた。これは、若者達が多種多様なメディアや友人から性の情報に接していること等が大きく影響していると思わ

れる。子ども白書では、携帯電話やインターネットの急速な普及で、子ども達は「出会い系サイト」を気軽に利用できることから、性に関して「恥ずかしいもの」「いやらしいもの」というような性への抵抗感やタブー視する感覚が薄れてきていると考える。

性行動については、第5回青少年の性行動全国調査¹⁰⁾で「携帯電話を持っている人のキス経験者は6割前後、性交経験者男子43%、女子32%、で平均すると37.5%」であり、これらと比べてもほぼ同様の結果であった。携帯電話を持っている人の方がより経験率が高く、性行動が活発におこなわれている。こうした背景には、性情報への接触、交友関係の広がりなどが、性行動の活発化と結びついていると考えられる。また、明らかな差はみられなかったが、携帯電話を持っている人の性別では「キス」「ペッティング」「セックス」のいずれの経験率もすべて男子より女子が上回っており、性別を越えむしろ逆転現象がみられている。落合は「近年の特徴は女子の性行動の活発化により、これまでみられていた男女差がほとんど開かなくなっている」と述べている。¹¹⁾

性行動の活発化がみられた高校生を取り巻く社会環境に注目して、第5回青少年の性行動全国調査¹²⁾は性行動の低年齢化を促す要因として、学校での交友関係に積極的で、社会的活動範囲が広い者、また一方で、家族や学校の授業に対する不適応や家族の統制を離れた性情報への接触や交友関係が、性行動を活発化させる傾向に結びついていることを指摘している。特に「性情報への接触や交友関係が家族の統制を離れていく傾向は、近年の情報化の進展に伴って、専用のテレビやビデオデッキ、PHS・携帯電話を持つものが、高校生の段階でも増えていることと関係している」と多くの貴重な調査結果から報告している。

・終わりに

今回、携帯電話の使用頻度や目的、性に関する意識や行動についていくつかの視点で検討し、関連があることが分かり、同時に高校生の性行動を加速させる要因の一つであることも分かった。携帯電話という便利なものが大人から若者へ、さらに、最近小学生まで持つ時代となり、いつでも、どこでも、誰とでも手軽に連絡できるようになった。これらの携帯電話の普及に代表される情報化の進展は、青少年におけるパーソナルコミュニケーションの活発化を促し、性行動の低年齢化、多様化を促進していると推測できる。

今後も携帯電話を持つ若者が増加すると思われるが、さまざまな危険性も指摘されている。携帯電話の功罪についてしっかり認識し、「ネチケット(ネットに関する守るべきマナー・倫理)やメディア・リテラシー(メディアの読解力をつけること)¹³⁾」をおとなも子どもとともに、その関り方を検討していく必要があると思われる。

本調査にご協力いただいた諸先生および高校生の皆様に深く感謝申し上げます。

本稿の要旨は第29回新潟母性衛生学会で発表した。

引用・参考文献

- 1) 中村 功．携帯電話の普及過程と社会的意味．
川浦康至・松田美佐（編）現代のエスプリNo.405
携帯電話と社会生活．東京：至文堂 2001．46-54
- 2) 中村 功．携帯メールの人間関係 日本人の情
報行動2000 東京大学社会情報研究所編．東京：
東京大学出版；2001．285-303
- 3) 日本性教育協会編 『「若者の性」白書 第5回青
少年の性行動全国調査報告 』．東京：小学館；
2001．24
- 4) 東京都生活文化局都民協働部青少年課編．青少
年を取り巻くメディア環境調査報告書 東京：東
京都生活文化局；2002．
- 5) 前掲 1) 54-57
- 6) 落合良行．あなたには親友がいるか 落合良
行・伊藤裕子・齋藤誠一著 青年の心理学 [改訂
版] ベーシック現代心理学 4 東京： ；2002 ．
153-169
- 7) 前掲 3) 24-25
- 8) 都筑芳子、宝田知恵子、河合久代他．群馬県に
おける平成12年度高校生の性意識・性行動に関す
るアンケート調査．思春期学．2002；20（2）：
293-295
- 9) 日本子どもを守る会（編）：子ども白書 58～
60，草土文化，2003．
- 10) 前掲 3) 28-29
- 11) 前掲 6) 71-89
- 12) 前掲 3) 44-45
- 13) 前掲 9) 62
- 14) 齋藤益子、木村好秀．高校生の性意識と性行動
に関する実態 - 都内某公立高校における調査成
績 ．思春期学．1999；17（2）263-271
- 15) 渋谷昌三．IT社会に望まれるコミュニケーション・スキル．思春期学．2002；20（4）：431-434
- 16) 松本清一．日本性科学体系 / 別冊 アジアの性
科学研究．東京：フリープレス星雲社；2002